

日本獣医師会学会学術誌投稿の手引き

(平成28年4月1日 日本獣医師会)

1 目 的

本手引きは、日本獣医師会学会学術誌投稿規程（以下「投稿規程」）に則り投稿原稿の審査や編集が円滑に行われることを目的に、投稿規程に記載のない、一般的な事項、編集において必要な事項、著者が見落としやすい事項等を示したものである。

2 投稿資格及び条件関連

- (1) 筆頭著者は、日本獣医師会構成獣医師若しくは賛助会員(個人に限る)でなければならない。それ以外の者が筆頭著者の場合は、投稿料を徴収する(投稿時審査料10,000円、採用時掲載料50,000円を納入する)。ただし、編集委員会が認めた者については、この限りでない。
- (2) 発表者は、原則として8名以内とし、研究材料提供等については、謝辞で記載する。
- (3) 投稿原稿は、獣医学が扱う臨床、動物衛生、食品衛生、環境衛生、人と動物の関係、獣医学教育、動物用医薬品・機器等を内容とする、獣医学術の振興・普及及び調査研究の推進に関する学術論文等を範囲とし、委員会において、掲載に相応しい学術分野を指定する。
- (4) 他の学会誌等に投稿中、若しくは発表した論文等は受け付けない。なお、口頭による発表はこの限りでない。

3 投稿要領関連

(1) 電子投稿の場合

ア 投稿は、本会投稿用ホームページの電子投稿システムで行う。

イ 原稿は、本会投稿WEBサイト上の投稿マニュアルに従い、必要事項を記入した後、本文(表紙から引用文献までを1つのファイルに集約し、ファイル名を「氏名-本文.拡張子名」とし、Word/doc, docx形式で保存する)、図(すべての図を番号順に1つのファイルに集約し、ファイル名を「氏名-図.拡張子名」とし、白黒1200dpi以上、グレースケール及びカラーは300dpi以上でPDFあるいは、PowerPoint/ppt, pptx形式、Word/doc, docx形式、Excel/xls, xls形式、Photoshop (Jpeg, Tiff)/jpg, tiff形式で保存

【別表】掲載区分と投稿原稿の制限枚数及び刷り上り頁枚数

掲載区分	投稿原稿制限枚数 A4判ワープロ等 (25字×24行)	刷り上り頁数
総説	24枚	6頁以内
原著	20枚	5頁以内
短報	16枚	4頁以内
技術講座	16枚	4頁以内
資料	8枚	2頁以内

する)、表(すべての表を番号順に1つのファイルに集約して、ファイル名を「氏名-表.拡張子名」とし、Word/doc, docx形式、Excel/xls, xls形式(映像化は不可)で保存する)を同サイト(<https://mc.manuscriptcentral.com/jvma>)にアップロードする(ファイル合計60MB以内)。

(2) 郵送投稿の場合

ア 投稿は、所要事項を記載し、著者全員の署名した投稿票を必ず添付する。

イ 投稿原稿は、4部を提出する。

(3) 原稿の体裁

原稿の文字色は、黒とし、A4判用紙を使用し、1頁(片面)を25字×24行の横書きで、明朝体(英文はCentury)を用い欄外下部中央にページ及び左欄外に行番号を付す。

なお、修正原稿については、修正箇所は青色の文字で記載する。

(4) 原稿の枚数等

ア 原稿の枚数は、表題、和文要約、英文要約(SUMMARY)、本文、図(写真を含む)・表等すべてを含めた枚数で、投稿区分の規定枚数は、別表のとおりとする。

イ 特に図、表は、本文との兼合い(枚数、印刷時の大きさ)を十分考慮し、規定枚数内に納める。

(5) そ の 他

以上の事項を逸脱した原稿については、審査以前に再提出を依頼する。

4 執筆要領関連(原著及び短報)

(1) 用 語:

ア 動植物名は、原則として漢字を使用する。ただし、一般的に使用されているものに限り(例:人、犬、猫、牛、豚、鶏、馬、羊等)、それ以外のものはカタカナで表示する。

イ 薬品名は、原則として一般名若しくは局方名を使用し、カタカナで記載する。また、機器名は原則として一般に使用される名称を和文で表示する。

ウ 本文中に一般名等で記載した薬品、機器等の商品(製品)名及び社名等は、一般名称の直後に括弧内で記載することができる(商品(製品)名、社名、都道府県名の順/例:ニチジュウワクチン、日獣製薬(株)、東京)。

(2) 表紙(第1頁):

ア 最上段左側に部門名、希望投稿区分及び「新規」(新規投稿原稿の場合)あるいは「継続」(継続審査原稿の場合)の表示を赤字で明記する。

イ 次いで、表題、著者名、所属機関名(大学は学部名、都道府県勤務は支所名(本所は部名)、までとし、「○○

動物病院」⇒「〇〇県 開業」(県名は所属獣医師会または所在地名),「株式会社」⇒「(株)」,「公益(一般)社団法人」⇒「(公(一)社)」,「公益(一般)財団法人」⇒「(公(一)財)」,「独立行政法人」⇒「(独)」,「国立研究開発法人」⇒「(国研)」,「特殊法人」⇒「(特)」等とする。)及び所在地住所(郵便番号を含む。併せて、実際の動物病院名も記す。)を和文で記載する。

ウ 表題は原則として副題,括弧,略号,「～について」,「～に関して」等は付けない。

エ 最下段には連絡責任者の所属(大学は教室名,都道府県勤務は係名まで,動物病院等は,実際の名称を記載),住所,電話番号(ファックス番号),メールアドレスを記入し,別刷を希望する場合には必要部数を赤字で明記する。

オ 表題が28字を超える場合には,28字以内の柱(ランニングヘッド)を記入する。

(3) 和文要約(第2頁):

字数は360字以内とし,要約の最下段には,原著では5語以内,短報では3語以内の日本語のキーワードを英文のKey wordsに対応する順で記載する。

(4) 英文SUMMARY(第3頁):

ア 英文の表題,著者名,著者の所属機関名,所在地住所(郵便番号を含む),SUMMARY及びKey wordsを記載する。

イ SUMMARYは,250語以内とし,行間を広く空けて記載する。

ウ SUMMARYはなるべく和文要約に対応した記載にする。

エ Key wordsは,SUMMARYの最下段にABC順で記載する。

(5) 本文(第4頁以降):

ア 原則として,①緒言(見出しは付けない),②材料及び方法,③成績,④考察,⑤引用文献の項目に区分して記述し,数字を用いて項目分けしない。(ただし,短報では必ずしも,この区分で記述する必要はない)。

イ 実験動物等の取り扱いについては,所属研究機関の動物実験ガイドライン(指針)に沿って動物に苦痛を与えないように実験を行った(または動物実験委員会の許可を得て実験を行った)旨を明記した上で,動物の苦痛を和らげる方法について具体的に記述し,当該動物を使用して実験を行う必要性と意義を説明し,併せて動物の入手方法と飼育状況を具体的に記載する。

ウ 図(写真)・表

(ア) 図(イラストレーションを含む)は,原則として黒一色とし,A4版の白紙を用いて,表題を付け,原図から直接製版できるものとする。

(イ) 表は,縦罫線を入れない。

(ウ) 写真は,白黒でコントラストの明瞭なもの(カラー

の際はモノクロ印刷でも明瞭なもの)とし,表題と簡単な説明を付け,原寸印刷が可能ないように必要部分を横7.8cm,縦6.0cmまたは横15.5cm,縦10.0cmとする(郵送の場合は,同サイズに整形して台紙にコーナーのみを糊付けする)。

(エ) 写真には図と同様に一連の番号を付ける(郵送の場合は,初回投稿時には4部すべての原稿にオリジナルを添付するが,修正原稿提出時には変更がない限りコピーでも可とする。また,デジタル画像を用いる際は,明瞭な印刷ができるよう光沢紙等の専用紙を用いる)。

(オ) 図及び表は,挿入位置を本文の右欄外に赤字で明記し,電子投稿の場合は,1つのファイルにまとめ,郵送の場合は,1点をそれぞれ1枚の台紙に貼付(デジタル画像も1枚ごとに印刷)し,写真とともに原稿の最後にまとめて添付する。

エ 引用文献

(ア) 研究に密接に関係のあるものを引用する。引用できる文献は,学会誌,専門的学術誌あるいは専門書とし,学会抄録,講演会テキスト,レフリー制度のない商業雑誌等は原則として引用できない。

(イ) 本文中では,著者名の直後等,引用箇所に[1,3-5]のように記載する。

(ウ) 文末に,本文中最初に引用された順に配列した引用文献リストをおく。①雑誌の場合は,著者名(全員列記),論文のタイトル名,誌名,巻,頁(1箇所のみ),年次(カッコ書き)とする。②電子ジャーナルの場合は,著者名(全員列記),論文のタイトル名,誌名,巻,頁(1箇所のみ),年次,媒体,入手先(URLをカッコ書き),入手日(「参照」として,年月日を記載)とする。③単行本の場合は,著者(著者が複数の場合は,引用した著者のみ),記事のタイトル名,書籍名,訳者名(1名のみ記載し,その他は和文では「他」,英文では「et al」とする),編者名,版,頁,発行者,発行地,年次(カッコ書き)とする。ただし,著者名がない際は,編者がいる際は編者名を,その他は,学会,研究会等の名称を記載する。

(エ) 和文誌名は原則として省略しない。ただし,慣例的に使用されているものはこの限りではない(例:日獣会誌,日獣誌など)。

(オ) 欧文誌名の省略は,Journal Title Abbreviationsによる。指定のないものは省略しない。

【雑誌の場合】

[1] 青山太郎,青山花子,赤坂次郎:子牛の開放性骨折の1例,日獣会誌,45,115-120(1992)

[2] 青山太郎,青山花子,江戸三郎,東京愛:犬のレプトスピラ症の抗原検出法,日獣誌,30,135-138(1992)

[3] Aoyama T, Aoyama H: The welfare of animals, Jpn J Vet Sci, 54, 120-124 (1989)

[4] Aoyama T, Aoyama H, Kanda J: A survey of heavy-

metal contamination in imported seafood, J Vet Med Sci, 54, 126-130 (1992)

- [5] Aoyama T, Aoyama H, Suzuki K, Tanaka S, Takahashi Y : Pathogenicity of the aino virus in japan, Am J Vet Res, 53, 155-160 (1992)

【電子ジャーナルの場合】

- [1] 永田四朗: 犬ブルセラ症の検出法, 家庭動物の感染学会誌, 25, 55-65(2010), (オンライン), (<http://www.petzoonosis/article/25/1/1/pdf/s>), (参照2013-04-20)
- [2] Williams A : Superinfection of bovine leukemia virus

genotypes in Africa, cattle doctor, 50, 215-220 (2012), (online), (<http://www.cattledoctor/lin/15/12/20/pdf/>), (accessed 2013-05-05)

【単行本の場合】

- [1] 神田一郎: マイコプラズマ, 獣医微生物学, 江戸三郎編, 第1版, 100-103, 青山堂出版, 東京 (1992)
- [2] Smith J : マイコトキシン中毒, 選択毒性, 赤坂次郎訳, 250, 学会出版センター, 東京 (1989)
- [3] Roitt IM : Immunophoresis, Immunology, Fred OG, et al eds, 2nd ed, 150-160, Grower Med Publ, London (1989)